アーティスト情報

・招待アーティスト　…2～12
・公募アーティスト　…13

イベント情報

・こどもプログラム　…14～15

出展決定　招待アーティスト

いくらまりえ

1986 年　神奈川県生まれ、東京都在住
2010 年　多摩美術大学絵画学科油画専攻卒

実家は幼稚園でした。記憶にある最初の作品は、その砂場で作った、お団子山でした。楽しくて楽しくて、無我夢中で作って、気づけば周りに誰もいなくなっても生ききっていた姿に今一番憧れています。自分はまだあの砂場に居て、今は無我夢中に絵を描きながら誰か遊びに来てくれるのを待っているのかもしれません。

《SOAK》2022 年、文房堂ギャラリー

ウ・ヒョンミン

1991 年　大韓民国出身・在住

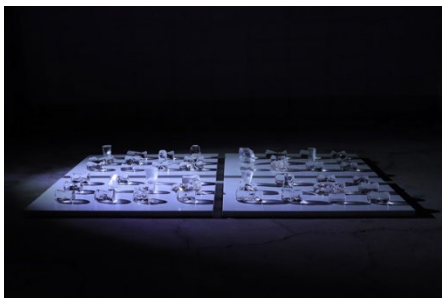
ウ・ヒョンミンは幼い頃から K-POP の世界で活躍してきた経緯を持つ。国内外で K-POP アーティストとして活躍しながらも、虚像と実像の間で自分の内面に向き合い、自身の人生の純粋な光を取り戻そうと絵を描き始めた。失いかけていた自らの意志、自由、希望、愛などの感情と向き合いながら、新しい人生、そして本来の自分を作っていくプロセスとして様々な作品に取り組んでいる。ウ・ヒョンミンの作品は内面から鳴り響くシグナルの記録であり、名前が分からない誰かに書く文のない手紙のようである。

《A Letter with No World》2023 年

小畑 亮平（おばたりょうへい）

1980 年　神戸市出身・大阪府在住
2019 年　京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術環境専攻修士課程 修了

他者の行為の痕跡が残された物品を収集し、それらの行為に宿る気配を探り出そうと試みています。それらの物品には、いつか誰かが確かにそこに存在し、そして何かしらの動作を行った瞬間があったのだ、という「確かさ」が残されています。無意識に作られたそれらの形には、そのそれぞれに誰にも意図的に真似をすることができない唯一無二の造形が残されており、人が無意識のうちに作り上げている創造性が宿っています。



《Their Breathing》2023 年

開発 好明（かいはつよしあき）

1966 年　山梨県生まれ、山梨県在住
1991 年　多摩美術大学 美術学部 絵画科油画専攻卒業
1993 年　多摩美術大学 大学院 美術研究科修士課程修了

観客参加型の美術作品を中心に、2004 年にヴェネチア・ビエンナーレ第 9 回国際建築展、2006 年に妻有トリエンナーレ「越後妻有大地の芸術祭 2006」に出品。2016 年に市原湖畔美術館にて「中2病展」を開催。また国外では、ベルリンのニューナショナルギャラリーにて「berlin-Tokyo/Tokyo-Berlin」などに参加し国内外で発表を行っている。2011 年以降デイリリーアートサーカスを企画し震災によって被害を受けた学校や仮設住宅に訪問して展示やワークショップを行った。
2024 年 8 月 3 日－11 月 10 日まで東京都現代美術館にて個展開催が予定されている。

《スペースホワイトカフェ》2017 年

金氏徹平（かねうじてっぺい）

1978 年　京都府生まれ、京都市在住
2003 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了

日常の事物を収集し、コラージュ的手法を用いて作品を制作。彫刻、絵画、映像、写真など表現形態は多岐にわたり、一貫して物質とイメージの関係を顕在化する造形システムの考案を探求。国内外での展覧会のほか、舞台美術や装丁も多数手掛ける。自身の映像作品を舞台化した「tower（THEATER）」（ロームシアター京都サウスホール、Kyoto Experiment 2017）では演出も担当。

《白地図》2011 年、国立国際美術館
撮影：福永一夫

川俣正（かわまたただし）

1953 年　北海道生まれ、フランス、パリ在住
1984 年　東京芸術大学大学院博士課程満期退学

第 40 回ヴェネツィア・ビエンナーレ（1982 年）の参加アーティストに選ばれ、その後もドクメンタ8（1987 年）、ドクメンタ9（1992 年）、第 3 回ミュンスター彫刻プロジェクト（1997 年）などの国際展にて高い評価を獲得し、1998 年に東京芸術大学先端芸術表現科の設立に主任教授として参画した。2005 年にはアーティストでありながら横浜トリエンナーレの総合ディレクターとして大規模な国際展の企画を手がけた。
2006 年以降、活動の拠点をフランス・パリに移し、パリ国立高等芸術学院にて教授職に就きながら、アーティストとして欧州を拠点に精力的な活動を展開する。 彼の仕事が関わっていく分野は、建築や都市計画、歴史学や社会学、日常のコミュニケーション、あるいは医療にまで及ぶ。現在、フランス・パリを拠点に欧州・アジア地域で活動を展開している。

《カワマタ・ブリュッケ》2022 年、スイス

北川太郎（きたがわたろう）

1976 年　兵庫県生まれ、京都府在住
2007 年　愛知県立芸術大学 大学院 美術研究科修了

文化庁新進芸術家在外研修により南米に派遣され、2010 年にはペルー共和国の首都リマにある Museo Pedro de OSMA にて個展等数々の実績と多彩な受賞歴を持ち、存在しないものの魅力を引き出す事に着目したシリーズ「静けさ」、時間の可視化を試みたシリーズ「時空ピラミッド」、触覚性に着目したシリーズ「手の考える世界」等、現代への警鐘となる展覧会へ多く参加し、石の内包する魅力をさまざまなアプローチで展開している。

《手の考える世界》2014-2022、
DOMANI 明日展・国立新美術館（撮影：山本糾）

城戸（きど）みゆき

1972 年　広島市出身、京都市在住
1995 年　女子美術大学絵画科洋画専攻卒業

日々の生活から派生するものはあまりに膨大なため、その全てについて考えることは誰にもできません。けれど、普段切り捨てられているもののある一点に注目して拾い上げ、それを掘り下げて行くと、私たちは日常の水面下に眠る風景の広大さを知ることができます。私たちはいつも何を見て、何を忘れているのでしょうか？　目の前の世界を少し変化させることができて、その素材に生活の中で再び出会った人たちが少し笑ってくれるような作品を作りたいと考えています。

《アイスランドの森》2013 年
ガルドゥール(アイスランド)Fresh winds Art Festival

佐藤 圭一（さとう けいいち）

1966 年　東京都生まれ、東京都在住
1994 年　東京藝術大学 大学院 美術研究科彫刻専攻修了

アイデアはいつも情景として頭の中に現れます。その情景を造形上の問題を解決しながら、設定に合わせ忠実に再現することが私の制作です。私にとって作品とは自己表現というよりも、「勝手にそこにいるモノ」という感覚を強く持っています。制作したのは確かに私なのですが、その事とは別に、特に展覧会などでは強くそう感じてしまいます。そして、それらの「いる場所」では私の意図するしないに関わらず活き活きとした時間が流れてゆき、私はそれをいつも憧れのような気分で眺めてしまいます。今回の作品も六甲山の開放的な空気の中で贅沢な時間を過ごしてくれればと願っています。

《おねすと》2021 年
六甲ミーツ・アート芸術散歩 2021

さわひらき

1977 年　石川県出身、ロンドン／金沢市在住
2003 年　ロンドン大学 スレード校美術学部 彫刻科 修士課程修了

映像・立体・平面作品などを組み合わせ、それらにより構成された空間/時間インスタレーションを展開し、独自の世界観を表現している。自らの記憶と他者の記憶の領域を行き来する反復運動の中から、特定のモチーフに光を当て、そこにある種の普遍性をはらむ儚さや懐かしさが立ち上がってくる作品群を展開している。

《absent》2018 年
六甲ミーツ・アート芸術散歩 2018

鈴木 将弘（すずき まさひろ）

1985 年　東京都出身、フランス在住
2015 年　エクサン=プロバンス高等芸術学校 ファインアート修士過程修了

「風土と身体の動き」との関係性を問いながら、各地でサイトスペシフィックな作品を制作。風土性を持つ人間の創作活動を自然現象の一つとして捉え、「アントロポイエシス・メゾロジック（Anthropoïésis mésologique）」と称し、直感と論理のフィードバックで思考を巡らす。その試行錯誤する過程自体を作品の本質と見なし、彫刻、文章、パフォーマンス映像はその痕跡であり、それぞれが補完し合うことで一つの作品が成り立つ。

《Mise à feu, mis en monde : la tour en argile grise
（焼成、世界に投じる－ 灰色の粘土の塔）》2021 年

高田 治（たかた おさむ）

1985 年　兵庫県出身、同地在住
2009 年　宝塚造形芸術大学大学院修了

特撮ヒーローやアニメのフィギュアが幼い頃から好きで、その事が現在の人体像の制作の根本にあるのかもしれない。
現在の制作における自分のフォーカスは、人の肉体、骨の構造、筋肉の動きにあり、人形ではなく、人間を表現したいと思っている。
そして自分が表現している人体像は、その像が男性であれ、女性であれ、全て自分自身だ。
言うならば、それらは僕の中では“OSAMU MAN”であり“OSAMU WOMAN”である。

左《25 歳のおさむ》2010 年、第 84 回国展
右《33 歳のおさむ》2018 年、第 92 回国展

髙橋匡太（たかはしきょうた）

1970 年　京都府生まれ、京都府在住
1995 年　京都市立芸術大学 大学院 美術研究科彫刻専攻修了

光や映像によるパブリックプロジェクション、インスタレーション、パフォーマンス公演など幅広く国内外で活動を行っている。京都市京セラ美術館、東京駅 100 周年記念ライトアップ、十和田市現代美術館など建築物へのライティングプロジェクトは、ダイナミックで造形的な光の作品を創り出す。多くの人とともに作る「夢のたね」、「ひかりの実」、「ひかりの花畑」など大規模な参加型アートプロジェクトも数多く手がけている。

《雲の故郷へ》2023 年馬祖民俗文物館、台湾
撮影：村上美都

髙橋瑠璃（たかはしるり）

1998 年　東京都出身・在住
2023 年　東京藝術大学 大学院 美術研究科彫刻専攻修了

生活の中で面白いと思った人間や人間の行動をモチーフに石の彫刻を作っています。人は知らない人と出会いながら色々な事を考えながら生活をしていて、出会った知らない人達も自分と同じように色々な事を考えていると思います。作品を見た人の、今までの思考や記憶によって、私とは違う何かを思い出してもらえる作品になればいいと思います。
滞在制作では現地に行ってから考えてその場所だからできる制作をしたいと考えています。

《ばれてしまった 1 人の時間》2023 年

生田目礼一（なまためれいいち）

1980 年　宮城県出身、埼玉県在住
2000 年　仙台中央理容美容専門学校

あらゆる物がガラス化した世界を描いたオリジナル小説をベースに、その情景をガラスのインスタレーション作品で表現。
環境問題や多様性をテーマに野外音楽フェスや商業施設など、屋内外を問わない展示スタイルで活動を展開。
光を放つ極彩色の植物やガラス化した多種多様な生物の物語を描く事で、環境破壊にも屈せず進化し続ける奇妙で不思議な生命の姿をファンタジックに表現。ガラス化した世界の体現を試みる。

《明日の記憶》2017 年 SONICART in SUMMER SONIC2017 撮影：馬場繁

春田美咲（はるたみさき）

1991 年　千葉県出身・在住
2015 年　多摩美術大学絵画学部油画専攻卒業

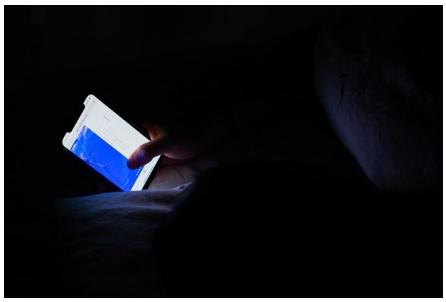
その時にしか感じえないこと、その場でしか感じえない風景をもとに作品を制作しております。
主に包装紙を扱った作品を制作しておりますが、作品のコンセプトに合わせて色々な素材を扱って表現します。
私が見て感じ取ったことを、見る人が絵画空間を通して体感できるような作品を目指しています。

《百花繚乱》2022 年　写真提供：DamaDamTal

布施琳太郎（ふせりんたろう）

1994 年　東京都出身・在住
2019 年　東京藝術大学 大学院映像研究科（メディア映像専攻）修了

スマートフォンの発売以降の都市における「孤独」や「二人であること」の回復に向けて、詩や批評の執筆、映像作品やウェブサイト、絵画などの制作、講義の自主企画、展覧会のキュレーションなどを実践。
主な活動として個展「新しい死体」（2022／PARCO MUSEUM TOKYO）、廃印刷工場におけるキュレーション展「惑星ザムザ」（2022／小高製本工業跡地）、600 ページのハンドアウトを片手に造船所跡地を巡る展覧会「沈黙のカテゴリー」（2021／名村造船所跡地〔クリエイティブセンター大阪〕）、ひとりずつしかアクセスできないウェブページを会場とした展覧会「隔離式濃厚接触室」（2020）など。

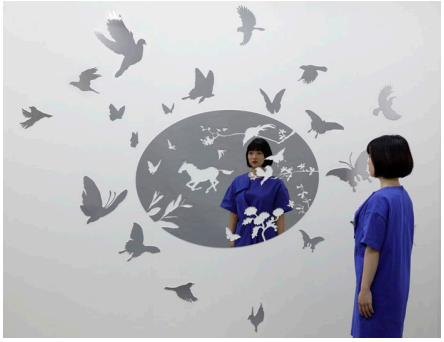


《隔離式濃厚接触室》2020 年

船井美佐（ふないみさ）

1974 年　京都府生まれ、東京在住
2001 年　筑波大学 大学院 芸術研究科修了

船井美佐は「楽園」と「境界」をテーマに、絵画によるインスタレーションを制作しています。
線描による即興のドローイングや、シェイプドキャンバスと鏡によって空間を構成するシリーズがあり、見るものがイメージの境界に入り込むような空間を作り出します。二次元と三次元、想像と現実、過去と未来を交差させることで、みえないものを形に表し、イマジネーションの力で新しい未来を形作ります。



《Utopia/Dystopia》2020 年　撮影：木奥恵三

松田 修（まつだおさむ）

1979 年　兵庫県出身、東京都在住
2009 年　東京芸術大学 大学院 美術研究科修了

松田修は映像や立体、ドローイングなどさまざまなメディアを用いた表現で、社会に潜む問題や現象、風俗をモチーフにして「生」や「死」といった普遍的なテーマに取り組んでいる。ひきこもりやニートといった、ときには世間から否定的な眼差しを向けられる存在や、繰り返し再生されるゲーム内での戦いや死、そのようなヴァーチャルな世界での生命観なども松田の作品の重要な要素となっている。近年の活動では、コロナ禍における貧困層の現実など、自身の生い立ちや経験をふまえた、当事者意識に基づく作品を多数発表。その一環として、初の単著となる「尼人」を出版した。

《奴隷の椅子》2020 年、こんなはずじゃない

三梨 伸（みつなしのぶお）

1960 年　神奈川県生まれ
1987 年　武蔵野美術大学 大学院 造形研究科

人間の手と自然から作られたものを素材として組み合わせ、
享楽の世界にのめり込みながら空間を制作しております。

サンパウロ市営市場、2022

宮永 愛子（みやながあいこ）

1974 年　京都府京都市出身、同地在住
2008 年　東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了

日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩や葉脈、陶器の貫入音を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時間を視覚化し、「変わりながらも存在し続ける世界」を表現した作品で注目を集める。
主な近年の展覧会に、個展「宮永愛子　詩を包む」（富山市ガラス美術館、2023）、個展「宮永愛子−海をよむ」（ZENBI−鍵善良房−KAGIZEN ART MUSEUM、京都、2023）、「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」（森美術館、東京、2023）等。第 70 回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞（2020）。

《夜に降る景色-時計-》2010 年撮影：宮島径
(c)MIYANAGA Aiko, Courtesy of Mizuma Art Gallery

葭村 太一（よしむらたいち）

1986 年　兵庫県出身、大阪府在住
2009 年　大阪芸術大学芸術学部デザイン学科卒業

人間の意識、痕跡や記憶、それらを想起させるような作品を手掛ける。近年は街中に残された落書きを木彫の彫刻へと立体的に再構築するシリーズを展開している。場所の持つ記憶を彫刻に落とし込み、その他メディアを組み合わせながら作品を制作する。主な展示として、「BankART Life7 UrbanNesting：再び都市に棲む」BankART Station（2024 年/神奈川）、「まちのことづて」A-LAB（2023 年/兵庫）、「Frieze seoul 2023 −フォーカスアジア− 」coex（2023 年/ソウル）、個展「34°　40’33”N135°　29’55”E」Marco gallery（2022 年　/　大阪）など。

《34°　37’21”N　135°　28’29”E》2023 年
撮影：増田好郎

WA!moto. “Motoka Watanabe”

1981 年　北海道伊達市出身　東京都在住
2006 年　武蔵野美術大学　造形学部　彫刻学科卒業

1981 年北海道伊達市生まれ、都市空間と人間の関係性に興味を持ち、人々が精神的に都市空間とつながる手助けとなるよう、公共空間での彫刻作品を制作・設置する取り組みをおこなっている。
主な作品に銀座 4 丁目　宝童稲荷神社参道“猿結参道”（2016 年、銀座）、MIYASHITA PARK SHIBUYA のボルダリングウォールのシンボルアート”YOUwe.”（2020 年、渋谷）、高さ 5.7m の大型彫刻　”Find Our Happiness”（2021 年、中国中山市）、″IYMMTRSTN.″ 2023（愛知県　犬山市　名鉄犬山遊園駅）がある。

″IYMMTRSTN″ 2023
（愛知県　犬山市　名鉄犬山遊園駅）
photo Alfie Goodrich.

青木 陵子 ＋伊藤存

2000 年結成・京都在住

2000 年から共同で活動を開始。交互に素材を交換しながら予測できない展開を生む筋書きのないアニメーションの制作を始める。2011 年より人の情緒の成長を観察し制作された映像インスタレーション作品「9歳までの境地」を継続的に制作。石巻市では、土地の中に在る素材やもの、小さな技術などを見つめ、人がつくる事自体に焦点をあてた作品群を展開。以降、様々な時や場所、人やものに出会いながら、つくることを通して共同で考え続けるプロジェクトを行なっている。

《9 歳までの境地》2011 年、国立国際美術館
撮影:福永一夫

青野 文昭

1968 年　宮城県出身・在住

1991 年より「再生と循環」をテーマに活動。「修復」という根源的かつ普遍的な概念を深く掘り下げ、いわゆる「つくるいとなみ」とは異なるタイプの創造性を探求。1996 年頃から、各地で見つけた破片を「修復」したり「補完」したりする試みを始めた。2011 年の東日本大震災で甚大な被害を受けた以後は、多層的な文脈（震災、歴史、場所、記憶、物語など）を考慮した「総合的復元」に取り組んでいる。

《なおす・代用・合体・侵入・連置「震災後東松島で収拾した車の復元」2013-1》2012 年
あいちトリエンナーレ 2013

Artist in Residence KOBE (AiRK)

2022 年結成・兵庫県を拠点に活動

2022 年 4 月より、神戸市中央区北野エリアで運営を開始したアーティスト・イン・レジデンス。神戸市内の文化施設や団体と提携し、招聘されたアーティストを滞在施設として受け入れる「Partnership Program in Kobe」と、自主企画として国内外のアーティストを招聘し、神戸市内でワークショップやイベントを開催するなど、地域とアーティストとの交流を促進する「Program by AiRK」「AiRK OPENCALL」といった活動を軸に、さらなる神戸文化の活性化を目指す。

Photo: Junpei Iwamoto

雨宮 庸介

1975 年　茨城県生まれ、山梨県在住
2013 年　サンドベルグインスティテュート(アムステルダム)ファインアート修士課程修了

ドローイング、彫刻、パフォーマンスなど多岐にわたるメディウムによって作品を制作。リンゴや石や人間などのありふれたモチーフを扱いながら、超絶技巧や独自の話法などにより、いつのまにか違う位相の現実に身をふれてしまう体験や、認識のアクセルとブレーキを同時に踏み込むような体験を提供する—そんな作品を通じて「現代」と「美術」について再考をうながすような作品を制作している。

《Apple》2024 年

アルネ・ヘンドリックス

1971 年　オランダ生まれ、アムステルダム在住
2011 年　アムステルダム大学卒業

アムステルダム在住のアーティスティックリサーチャーのアルネ・ヘンドリックスはキュレーターや歴史家でもあります。彼の多角的なアプローチはアーティスト、サイエンティスト、そしてジャーナリストの視点を持っています。そのリサーチは人々に、長い間社会で認識されてきたトピックに関して、疑問をもつ手助けをします。彼の主な研究対象は未来の人間の身体、癌の今後の推移、継続的な経済成長、そして人が小さくなる可能性や願望についてです。

《Fatberg》2016 年−現在も継続中、NDSM Amsterdam

nl /rokko project（エヌエル　ロッコウ　プロジェクト）

2022 年 9 月　神戸市六甲山町にて結成・プロジェクトスタート
（主なメンバー　小泉寛明、ロク・ヤンセン）

nl/rokko project は、ROKKONOMAD を運営するチームメンバーにより結成された「これからの働き方」を探求するリサーチグループです。オランダ王国大使館の協力のもと、オランダと日本をつなぎ、社会問題にチャレンジするプロジェクト「nl/local project − オランダとつくる、私たちの未来−」のメンバーの一つとして活動しています。

《「 成長」って何？》2023 年、ROKKONOMAD
六甲ミーツ・アート芸術散歩 2023 beyond

大野 智史（おおのさとし）

1980 年　岐阜県生まれ、山梨県富士吉田市在住
2004 年　東京造形大学造形学部美術学科卒業

1980 年岐阜県生まれ。2004 年東京造形大学卒業。現在山梨県富士吉田市にて制作活動を行っており、原生林のエネルギーを感じながら、自然や現代社会における自我の内面を表し、追求してきた。
自然と人工、生と死、光と闇、東洋と西洋など、相対する価値観を画面の中で融合し、共存させている点が特徴。その中で自画像、両性具有、原生林、亜熱帯植物、プリズム、スピーカーといったモチーフは、重要な要素となっている。その世界観は幻想的でパラドックス、豊穣でカオス、空想と現実の両視点で、根源的な答えと調和を探し続けている。

《Sleep in Jungle.》2018 年、
Daimler Contemporary Berlin、ドイツ
Photo by Kenji Takahashi ©Satoshi Ohno,
Courtesy of Tomio Koyama Gallery

小出 ナオキ（こいで）

1968 年　愛知県出身、千葉県在住
1992 年　東京造形大学造形学部美術学科卒業

1968 年愛知県生まれ。1992 年に東京造形大学造形学部美術学科を卒業し、現在は千葉県を拠点に制作活動を行っている。
活動初期には、小出の個人史ともいえる生活の転機をテーマに FRP や木などを素材とした立体、写真作品を発表。2010 年滋賀県立陶芸の森での滞在制作より、セラミックでの作品制作を開始し現在まで継続する手法となっている。近年は自分の心の表れを正直に表現し、思考のバイアスを超え物理的な負荷から生まれた、ありそうでない壮大で楽しい作品世界観は不可思議な魅力にあふれている。

《picnic with undead》2017 年、
Photo by Ikuhiro Watanabe
©Naoki Koide, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

田岡 和也（たおかかずや） ×Omult.Venzer（オマルトヴェンザー）

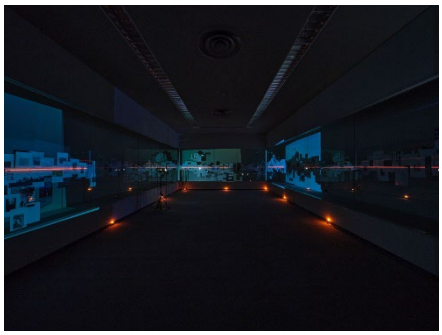
日常と山体験をことごとく作品化する田岡和也と、制作において「遊びの延長」を指標する Omult.Venzer（オマルトヴェンザー）の、2 度目の協働によるユニット。
田岡は山歩きが趣味で、六甲山にも頻繁に登っている。山に登る度に1冊の ZINE「山と TAOKA」を制作しており、その数は 110 冊を超える。
Omult.Venzer は「遊びの延長」を理念とする、造形アートブランド。「もの作りは生活を豊かにするための根源的な遊びである」との考えから、日常への目線をユーモラスに表現した作品を製作する。

撮影:村上竜一 Ryuichi Murakami

竹中 美幸（たけなかみゆき）

岐阜県出身、東京都在住
多摩美術大学大学院美術研究科修了

主に透明な素材を用いながら、光や影を取り込んだ平面作品やインスタレーションに展開。記憶や記録に興味を持ち、近年では 35mm 映像用ポジフィルムに直接光を感光させ、消えゆくメディアに消えゆくものの影を記録させた作品なども制作。見過ごしてしまいそうな景や、物の記憶をそっと掬い上げ記録し、作品に昇華させている。



《終わらぬ旅》2023 年、
スイトピアセンターアートギャラリー、撮影：中村晃

楢木野 淑子（ならぎのよしこ）

1985 年 大阪府出身・在住
2010 年 京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了

植物や山、動物などをモチーフに陶の持つ質感や色彩、形やその重みを使うことで、一目見て心が跳ねるような、何か良いことが起こりそうな予感を抱くものを目指して制作しています。
土に日々を刻み、土から陶になる作品は、重みと厚みを携えながらキラキラと煌めき華やかさや豊かさ、生命力が溢れる喜びを謳い上げます。自然と人が作り上げるユートピアがそこにはあります。

《山のトーン》2024 年、
Kyoto Art for Tomorrow 2024 —京都府新鋭選抜展—
京都文化博物館（京都）

西田 秀己（にしだひでみ）

1986 年 北海道出身、東京都在住
2014 年 ベルゲン芸術デザイン大学芸術学部修士課程 修了

ノルウェー王国ベルゲン芸術デザイン大学芸術学部修士課程修了。光州ビエンナーレ（2014 年／韓国光州）、札幌国際芸術祭（2014 年／札幌）ほか多数で作品を発表。ロンドン、台湾での活動を経て、2018 年から 2019 年にかけてポーラ美術振興財団在外研修員としてモスクワに滞在。風景と人との対話を生む環境インスタレーション作家として活動するほか、舞台美術、空間デザイン、インスタレーション、パフォーマンス等も手がける。

《fragile chairs》2017 年、飛生芸術祭 2017
ポロト湖（北海道白老町）撮影：西田秀己

野村 由香（のむら ゆか）

1994 年　岐阜県出身、京都府在住
2019 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻　修了

日常生活や社会、自然に通底している根源的な力の作用について関心を持っています。世界を動かす力の作用とそのベクトル、そこに流れる固有の時間を造形やインスタレーションとして表現しています。制作を通して日常を別の角度から捉え直すことで、私たちの世界の未知の「かたち」や「わからなさ」に触れ、生きるということはどういうことなのかを考えようとしています。

《池のかめが顔をだして潜る》2022 年、
京芸　transmit program 2022
京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、撮影:来田猛

堀田 ゆうか（ほった）

1999 年　愛知県出身、東京都在住
2022 年　東京藝術大学美術学部油画専攻卒業

絵画表現を起点とし、支持体を切り出し、その場に身体を折り畳んでいくように、イメージを折り重ねていく平面作品や、空間自体を支持体のように捉えたインスタレーション作品など、平面と空間を行き来しながら、捉え所のない身体の気配に触れようと試みる。
また近作では並行して版表現を作品に組み込むなど、様々なメディアを介したドローイングなども制作している。

《からです》2023 年、
からです、AP どのう(茨城)
撮影：室井悠輔

マキコムズ

2013 年結成

2013 年結成。立体が得意なマスダマキコ、平面が得意なカワサキマキによる主に子ども・遊び・作るをキーワードに展開しているクリエイティブユニット。「マキコムズ　」は双方の名前からと大人や子ども、周りの人を面白い事に巻き込み、巻き込まれてみよう！という意味も。日常の何気ないことから発想して、巨大な物、長い物、楽しい事、面白い事、バカバカしい事を思いついては、参加型の造形ワークショップや作品にしている。それぞれ二児の母。

《メー坊》2022 年、
六甲ミーツ・アート芸術散歩 2022

三原聡一郎（みはらそういちろう）

1980 年　東京都出身、京都府在住
2006 年　岐阜県立情報科学芸術大学院大学[IAMAS]卒業

世界に対して開かれたシステムを提示し、音、泡、放射線、虹、微生物、苔、気流、土、水そして電子など、物質や現象の「芸術」への読みかえを試みている。2011　年の東日本大震災を機に「空白のプロジェクト」を開始。以降より滞在制作にて、北極圏から熱帯雨林、軍事境界からバイオアートラボまで、芸術の中心から極限環境に至るまで、これまでに計 9 カ国
18 箇所を渡る。2022 年より「3 月 11 日に波に乗ろう」共同主催。

《自然の監視自然の生成》2019 年、
はかなさの果敢さ（国際芸術センター青森）
撮影：山本糾

ロプ・ファン・ミエルロ

オランダ出身、アムステルダム在住
2008 年 Willem de Kooning Academy,
Design Academy Eindhoven（アイントホーフェンデザインアカデミー）卒業

アムステルダム在住のイラストレーター/アーティストのロプは 2008 年アイントホーフェンデザインアカデミーを卒業。ファッションやカルチャー、ミュージックの領域でコラボレーションをしています。ロプの遊び心のある作風やアイコニックな作品で知られています。ペインティングだけでなく、毛足の長いモヘアのタペストリーやハンドメイドのウールのラグ、アニメーション作品などがあり、ほとんどの制作工程はドローイングやペインティングから始まります。

《バタフライ》2021 年、ベンチプレイヤーズ個展、
Reference Studios ベルリン

渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト）

わたなべあつし

1978 年 神奈川県出身・在住
2009 年 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了

現代美術家／社会活動家。大学卒業後に深刻なひきこもりを経験したものの、回復直後から精力的に活動を展開し続けてきた。孤独・孤立にまつわる関係性の課題や、共感可能性と不可能性、社会包摂の在り方などをテーマに扱う。2018 年から「アイムヒア プロジェクト」を主宰し、不可視化されがちな生きづらさやトラウマを抱える人々との協働企画を多数実施。活動家として、当事者運動やケア実践、メディア出演、講演なども多い。

《月はまた昇る（プロジェクト「同じ月を見た日」より）》
2020/2022、瀬戸内国際芸術祭 2022、
屋島山上（香川） 撮影：宮脇慎太郎

西野 達

にしのたつ

「普段あまりアートに興味のない一般の人々」を観客と想定し、美術館やギャラリーという狭いアートシーンを捨て、屋外に作品を設置するスタイルで 1997 年にヨーロッパで作家活動を開始。「人間の想像力の拡張」をアートの存在理由とし、「笑い、暴力、セクシー」を武器に制作する。
屋外のモニュメントや街灯などを取り込んで部屋を建築しリビングルームとして公開、あるいは実際にホテルとして営業するなど、公共空間を舞台とした人々を巻き込む大胆で冒険的なプロジェクトで世界的に知られる。現在は東京、ベルリンを拠点に活動。
主な作品に、《マーライオンホテル》（2011年）、《The Life's Little Worries of Général Mellinet》（2015年）、《ハチ公の部屋》（2023年）他、多数。

《マーライオンホテル》2011年
シンガポール

出展決定　公募アーティスト

公募アーティストは2024年2月1日（木）～5月6日（月・休）の期間で募集し、**過去最多となる応募総数398点の作品プランが集まりました**。今年は賞金と入選者に提供する制作補助金を増額するとともに、奨励賞を1組増やし、より自由な発想による作品プランのチャレンジと実現を支援します。5月20日（月）に実施された公募1次審査会で15組の入選者が決まり、この後、作品プランを具体化し、8月1日（木）から随時現地での制作を行います。

アーバン　ニット　かねひらしょうた
URBAN KNIT（兼平 翔 太）

《Telephone After All》2022 年、
GREEN SPRINGS
撮影: Daisaku OOZU

あつめやさん

《あつめや新聞》2023 年、京都

おおいしあきお
大石章生

《鉄絵南瓜文鉢》2024 年、
第 55 回東海伝統工芸展、愛知

おかだけんたろう
岡田健太郎

《色ずく景体》
2023 年、
撮影:望月小夜加

かまはらなぎ
蒲原凪×
たらよしふみ　むらたゆうた
田羅義史×村田優大

《Food Hood》2023 年、
MITTSU PROJECT、Spiral(東京)

くらふじたつひろ
倉富二達広

《混沌と調和》2022 年、
Crocodile House, Singapore

こんどうなおし
近藤 尚

《埋まる家》2022 年、
撮影：yujiro ichioka

しゅういっきょう
周逸 喬

《夢黄粱》2023 年、
寺町京極|商店街美術館

たなかゆうな
田中優菜

《愛おもう屋台》2018 年、
Tokyo Midtown Award 2018

つちだしょう
土田翔

《NO-COUNT》2021 年、
UNPEL GALLERY

ハーフェン　ほんだ　こう
HAFEN 本田 耕

《活動の積み木》2022 年、
撮影：Tomoko Hirayanagi

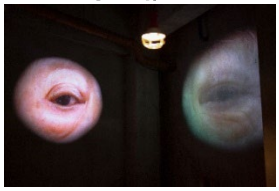
はらだあきお
原田明夫

《地掌器》2024 年、
3 つの再創造（Recreate）

ふくしましゅうへい
福島周平

《Package》2023 年、
公益財団法人クマ財団

みずたまさや
水田雅也



《現代：熱海鰐園》2023 年、
ATAMI ART GRANT 2023
撮影：鈴木竜一朗

むらかみかおる
村上 郁

《電球都市》2014 年、
Bulb Cities、遊工房アートスペース

News Release

＜公募大賞について＞

■8月22日（木） 2次審査
完成した作品を審査し、神戸六甲ミーツ・アート2024 beyond公募大賞を決定します。

【神戸六甲ミーツ・アート2024 beyond公募大賞】
・グランプリ 1組（賞金150万円）　※昨年より50万円増額
・準グランプリ 1組（賞金50万円）　※昨年より20万円増額
・奨励賞 2組（賞金30万円）　※昨年より1組増、20万円増額

■8月23日（金） 表彰式
神戸六甲ミーツ・アート2024 beyond 公募大賞の発表と表彰及びレセプションパーティーを行います。

こども向けワークショップ

こどもプログラムの一環として、以下のワークショップの開催を予定しています。
それぞれのワークショップにつきまして、場所や日程等の変更の可能性があります。
確定次第、神戸六甲ミーツ・アート 2024 beyond 公式 HP のイベントページ（https://rokkomeetsart.jp/）及び公式 SNS にて詳細を発表いたします。
※下記イベントのご参加には、当日有効な神戸六甲ミーツ・アート 2024 beyond 鑑賞パスポートが必要です。

◆船井美佐／山の穴から森を覗こう

ROKKO 森の音ミュージアムの SIKI ガーデンには、さまざまな植物が育てられていて、鳥や動物もやってきます。同ガーデンに展示されている船井美佐の屋外作品「森を覗く山の穴」を鑑賞したあと、ガーデナー木村友美のガーデンツアーを行います。森や植物について観察して学び、いろいろな形やイメージを見つけて、アーティスト船井美佐と一緒に絵を描きます。

船井美佐「山の穴から森を覗こう」
※ワークショップイメージ

【日時】10月5日（土） ①10:30-12:30 ②14:00-16:00
【会場】ROKKO 森の音ミュージアム
【対象】4歳から大人まで
【定員】各回8名
【料金】無料

◆金野まさみ／「墨すり体験」「立体に書を書いてみよう」「藍で書いてみよう」「植物を使って書いてみよう」

学校では触れなくなった墨すりの体験をはじめ、書道についてのワークショップを行います。書を立体にしてみたり、墨以外を使用したり、筆を植物に持ち替えたり、様々な書道の楽しみ方を提案します。

金野まさみ「墨すり体験」
「落ち葉、草花を配して字を書こう」
2023 年

【日時】9月8日(日)、10月13日(日)、11月10日(日)
11:00-16:00（仮）
【会場】旧グランドホテルスカイヴィラ（風の教会エリア）
【対象】5歳から大人まで
【定員】随時受付　材料がなくなり次第終了
【料金】無料

◆笠田祐樹／伝統と歴史と古典にそっと触れてみよう

日本に永く続く伝統芸能である「能」を、様々な角度から鑑賞し体験します。全体の解説を聞いた後に、舞を鑑賞し、謡（うたい）、小鼓（こつづみ）、所作を体験していただきます。

笠田祐樹「伝統と歴史と
古典にそっと触れてみよう」

【日時】9月15日(日) 13:30-14:10
【会場】トレイルエリア内新池
【対象】5歳から大人
【定員】随時受付
【料金】無料

◆若林久未来／青写真を撮ってみよう

アンナ・アトキンスの写真がはじめて挿入されたと言われる 1843 年刊行の植物図鑑『Photographs of British Algae』に使用された古典写真（青写真）を写真家 若林久未来さんと作ります。
光と影を考えて紙の上に配置し、日光を当てることで当時の青写真を再現します。（Artistic Photogram®）

【日時】9月23日（月・祝） 時間未定
【会場】未定
【対象】5歳から大人まで
【定員】随時受付　材料がなくなり次第終了
【料金】無料

若林久未来
「青写真を撮ってみよう」
※イメージ

◆辻本愛／フォトコラージュ

雑誌やチラシなどからお気に入りの部分を集めて台紙に貼り、
自分だけのオリジナルフォトコラージュを作ります。

【日時】9月21日（土）、10月26日（土）、11月17日（日） 時間未定
【会場】旧グランドホテルスカイヴィラ（風の教会エリア）
【対象】5歳から大人まで
【定員】随時受付　材料がなくなり次第終了
【料金】無料

辻本愛「フォトコラージュ」
※イメージ

◆MIZPAM／おおきな絵を描いてみよう

青空のもとで講師がこどもたちと一緒に大きなキャンバスに
絵を描くワークショップです。完成した作品を会場に展示します。

【日時】9月29日（日）、11月3日（日） 時間未定
【会場】風の教会エリア
【対象】5歳から大人まで
【定員】随時受付
【料金】無料

MIZPAM・MOYA
「おおきなキャンバスに絵をかこう」
2023 年

◆ハヤシジュンジロウ

昨年の本芸術祭で、「仮面を作ってみよう」というワークショップを開催した、グラフィックデザイナーのハヤシジュンジロウが今年も参加決定。
※ワークショップ内容については後日、詳細を発表予定です。

【日時】10月20日（日） 時間未定
【会場】旧グランドホテルスカイヴィラ（風の教会エリア）（仮）
【対象】5歳から大人まで
【定員】未定
【料金】無料

「仮面を作ってみよう」2023 年

※プログラムディレクター：後藤みゆき（「船井美佐／山の穴から森を覗こう」を除くこども向けワークショップ）